

入試区分と学びの接続について

——コロナ禍の学修状況——

田中 泉（福岡工業大学短期大学部）¹⁾，木村 智志，河野 悟史，安永 卓生（九州工業大学）

コロナ禍では大学の教育が一部機能不全に陥っただけではなく、学生生活自体が成立しない状況が続いた。この状況下での学修状況を精査することは、多様な選抜体系や学部教育のあり方にも示唆を与えると考えられる。本稿では総合型選抜入学者を中心に、一般選抜、学校推薦型選抜、国際バカロレア選抜の学生、さらには学生の在籍する研究室の指導教員に対してアンケートとヒアリングを実施し、選抜方法と学生の学び状況及び環境との関係について調査した。その結果、学生の動機づけと学力が相補的な関係になっていると同時に、多様な学生に適した学修環境を整えることの重要性が示された。

キーワード：選抜方法の多様化、学修環境、コロナ禍

1 選抜方法の多様化と学修状況

入学者選抜の多様化に従って様々な課題が挙げられている。総合型選抜は歴史が浅いにも関わらず組上に載ることも多く、すでに神話が独り歩きしていることも否定できない。

例えば、総合型・学校推薦型等の推薦入試の入学者が半数を超え、年内に合格を獲得する「年内入試」が主流になりつつある。その影響で大学生の学力低下や、受験する階層の固定化などが進行しているなど様々な憶説が流布する状況が生まれている。しかしながらその実情は虚実混交であり鵜呑みにはできない（木村，2021）。

九州工業大学は 2019 年度選抜からグループワークを課す AO 入試（現・総合型選抜Ⅱ）の形態で総合型選抜を実施した（藤江ほか，2019）。さらに、2021 年度選抜からは、より多様な学生を受け入れるための選抜として大学入学共通テストを課さない総合型選抜Ⅰを開始した。

AO 入試による入学者の第 1 世代は 2023 年度に修士課程 1 年生を迎えた。さらに、この世代は基礎教育のみならず専門教育においても、コロナ禍²⁾で大きな影響を受けたと考えられる（木村ほか，2024）。

この観点から総合型選抜の学生を中心に表 1 に示す複数の集団に対して調査を行い、その評価を実施した。

2 調査方法

表 1 調査に関わる集団

集団	対象者	回答人数 (対象人数に対する割合)	対象人数
A	学部 1～3 年生 (総合型選抜入学者)	124 (44%)	285
B	学部 4 年生 (総合型選抜入学者)	18 (50%)	36
C	B が在籍する研究室の指導教員	23 (70%)	33
D	博士前期課程 1, 2 年生 (総合型選抜入学者 9 名が所属する研究室の全選抜入学者)	18 (90%)	20
E	D が在籍する研究室の指導教員	8 (89%)	9
F	国際バカロレア選抜入学者	2 (100%)	2
G	学生全体に対する生活実態調査	1777 (32%)	5614

表 1 に示す各集団に対し、表 2 のアンケート・ヒアリングを実施した（調査期間：2022 年 10 月～2023 年 3 月）。質問項目番号は、本稿で利用したアンケート項目の通し番号としている。

表 2 各集団に対するアンケート・ヒアリング内容

集団	質問内容
A	問 1) 大学での学びについて適応できていますか？ 問 2) 勉強などで協力できる友人・知人はいますか？ (複数回答可) 問 3) 入学後、総合型選抜で重視される力(表現力や主体性・協働性・多様性)を発揮していますか？ 問 4) 大学生生活の順調度を 5 段階で表現してください。 問 5) 入学後、授業外の学習については、どのようなことに重点を置いていますか？ (授業等で出された課題やレポート等の作成は除く) 問 6) 入学後、自己管理がうまくいっていますか？
1	問 7) 1 年の時に苦労した科目について教えてください。 (3 つまで) 問 8) 大学生生活の順調度を 5 段階で表現してください。 問 9) 入学時と卒業研究時において、学習の仕方に変化はありましたか？ 問 10) 卒業後の進路をお聞かせください。
C	問 11) 対象学生の卒業研究に対する評価をお聞かせ下さい。 (直近数年での学生の中央値を普通とする) 問 12) 対象学生の研究室での様子について、総合的な評価をお聞かせください。 (直近数年での学生の中央値を普通とする) 問 13) 卒業研究に主体的に取り組んでいた。 問 14) 卒業研究に取り組む上で必要な学力を身につけていた。 問 15) 学会発表等につながるようなレベルの高い研究活動に取り組んでいた。
D	問 16) 入学後、不足していた高校時代の基礎知識は何ですか？ 問 17) 入学後研究分野を変更した時期はいつですか？ (学部内での変更を含む、複数回答可) 問 18) 学部での学び方について教えてください。 問 19) 大学での学びで障害や有意義であったことを教えてください。 問 20) 研究室での教育について教えてください。
E	問 21) 研究室配属時で求められる学力について教えて下さい。 問 22) 求める能力・姿勢、現状について教えて下さい。
F	問 23) 大学における学修の状況について教えて下さい。
G	問 24) 満足できない授業があるとすれば、その理由は何ですか(複数回答可) 問 25) 修学上の問題を抱えた場合、どのように解消していますか(複数回答可)

注) A, B, C, G: アンケート; D, E, F: ヒアリング

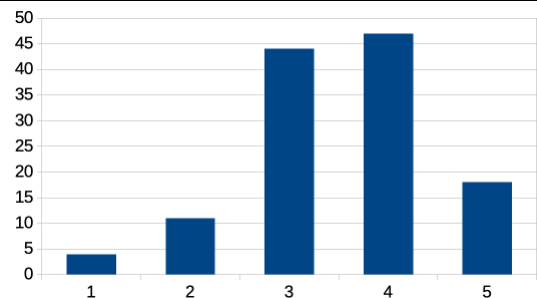
3 総合型選抜入学者調査 (1～3 年生)

集団<A> (総合型選抜Ⅰ (共通テストを利用しない) : 63 名, 総合型選抜Ⅱ (共通テストを利用する) : 61 名について調査した。

まず、大学の学びに対応できている(問 1)と答えた学生は 74% (十分: 12%, ほとんど: 62%)であった。また、表 3 に示したように、コロナ禍であっても、協力できる友人・知人がいること分かった(問 2)。また、総合型選抜で重視される力が、学修活動で発揮できていると感じている学生は、77% (十分: 25%, やや発揮: 52%)であり(問 3), 大学の学びに対応できると答えた学生と同等であった。大学生生活に対応できていると 5 段階の内 3 段階以上に評価した学生は 88% (図 1, 4 以上: 52%), であった。コロナ禍でも、十分に対応できていたと考えられる。

表 3 協力できる友人・知人

1. 自力で行うため、特にいない	9 名
2. 将来に目を向けて相談、学ぶ知人がいる	57 名
3. 授業や実習に向けて学びあう、教えあう知人がいる	109 名

図 1 大学生生活への順調度 (問 4 に対応)
横軸: 1 (不調) ~ 5 (好調), 縦軸: 人数

ここで、全国大学生協連の調査より生活の充実度 (1～3 年生: それぞれ 90.5%, 87%, 84%) が、コロナ禍前の 2019 年と同水準に回復していることと符合しており(全国大学生協連, 2023), 総合型選抜の学生が友人を作り大学生生活に適応できていることが示唆された。

学習活動においては、表 4 に示されたように講義で課された課題以外には、主として講義の復習、苦手科目並びにスキルアップ(技術系及び語学系)に重点をおいた活動をしていることが分かった。しかし自己管理が上手くいっていると考えている学生は、61% (4 段階中上位 2 段階)となっており、学びには対応し生活には対応できているものの、自己管理はあまり

上手くいっていないと感じている学生がいることが分かった（問 6）。

表 4 授業外の学習での重点（問 5 に対応）

選択項目	人数
1. 講義の予習	22 名
2. 講義の復習	96 名
3. 苦手科目の克服	34 名
4. 資格の取得やスキルアップ（技術系）	22 名
5. 資格の取得やスキルアップ（語学系）	29 名
6. 業界研究などキャリアに関する学び	15 名
7. その他	6 名

4 総合型選抜入学者（4 年生）

次に、集団について調査した結果を示す。数学、物理、情報などの理工系基礎科目における厳しい状況（問 7）が見られたが、学生生活（図 2：問 8）は順調に過ごしていると判断している（3 以上：83%）ことが分かった。図 1 と比較して、順調（4 以上：78%）と考える割合が高かった。学習の仕方の変化（問 9）が異なると答えた学生が 61%（全く異なる：22%，大分異なる：39%）であったことを鑑みると、研究室に配属され、卒業研究を始める中で、総合型選抜入学者の満足度が高まったことが想定され、総合型選抜の入学者の力が生かされる場面が増えたと考えられた。また、大学院に進学する割合（61%：11/18）は、九州工業大学の R4 年度卒業生のうちの大学院進学率（63%：581/915）と同程度であった（問 10）。学部時代における学習状況には苦労しているものの、研究室配属後、更なる進学を目指すなど、大学での学びに適応している。

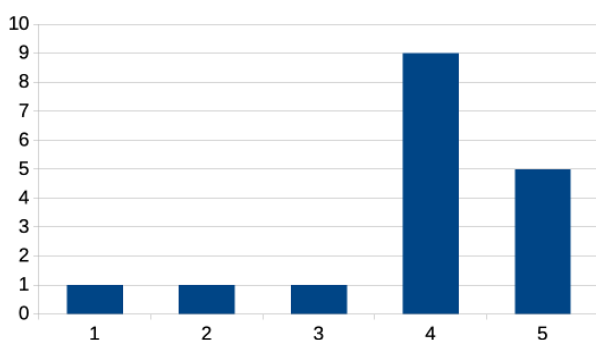


図 2 大学生生活への順調度（問 8 に対応）
横軸：1（不調）～5（好調），縦軸：人数

5 卒業研究における指導教員の評価

集団<C>卒業研究における評価について、指導教員にアンケート調査を行った。卒業研究における指導教員の評価（7 段階）を表 5 に示す。低い（5～7）と判断した教員 9 名に対して、高い（1～3）と判断した教員 11 名であり、大きな差はなかったが、上位からみて第 1 四分位が 2，中央値が 4，第 3 四分位が 5 であることから、若干上位層に偏っていることが分かった。また、総合評価では、低い（5～7）と判断した教員 8 名に対して、高い（1～3）と判断した教員 13 名であった。

また、卒業研究を進める上での取組（表 6，問 13～15：5 段階）から、集団の学生が主体的で、研究を進める学力をもち、半数の研究レベルが学会発表等に繋がるレベルであると指導教員は評価していることが分かった。以上の点から、指導教員は研究室配属時、卒業時において、比較的高い評価を与えていると考えられた。

表 5 卒業研究における評価（問 11, 12 に対応）

評価	研究評価	総合評価
1. かなり高い	3 名	2 名
2. 高い	5 名	5 名
3. やや高い	3 名	6 名
4. 普通	3 名	2 名
5. やや低い	6 名	5 名
6. 低い	2 名	2 名
7. かなり低い	1 名	1 名

注：学生全体の中央値を 4 として判断された数値

表 6 卒業研究における取組（問 13, 14, 15 に対応）

	主体性	学力	研究レベル
1. 当てはまる	9 名	4 名	6 名
2. やや当てはまる	3 名	12 名	6 名
3. どちらともいえない	3 名	1 名	3 名
4. やや当てはまらない	3 名	5 名	
5. 当てはまらない	0 名	1 名	

6 博士前期課程の学生へヒアリング結果

集団<D>総合型選抜入学者 9 名及び、同一研究室に所属するそれ以外の選抜の学生 9 名（一般選抜、学校推薦型選抜、高専より編入）に対し、研究室もしくは個人当たり、40 分から 100 分のヒアリングを実施した。

問 16 では、各教科を細目に分けて、聞き取りを行

い、その結果を図 3 で示した。不足した基礎知識のうち細目でみると、数学Ⅰに関しては全員が、「データの分析」を挙げた。数学Ⅱに関しては初等関数、微分、数学Ⅲに関しては微積分、物理に関しては力学を 8 割の学生が挙げた。いずれの細目も入学後の理系基礎科目に対応したものである。欧米の大学同様、入学時の基礎理工科目は学生にとって最初の関門となっており、それは選抜区分によらなかった。

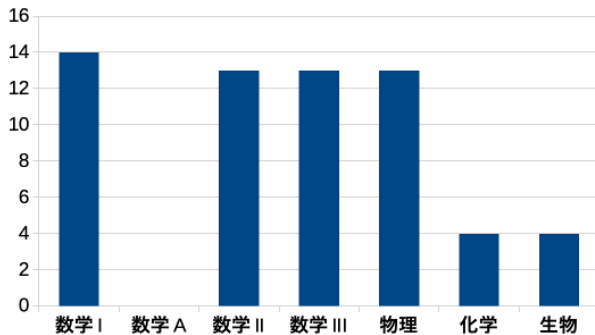


図 3 不足していた高校時代の基礎知識 縦軸：人数

表 7 研究分野を変更した時期（問 17 に対応）

時期	人数	
	全体	総合型選抜
1. 学部 1～3 年	7 名	3 名
2. 研究室配属時	7 名	2 名
3. 大学院進学時	3 名	2 名
4. 就職時	4 名	2 名

研究分野については、研究室配属時または大学院進学時まで多くの学生（13/18 名）が入試区分によらず進路を吟味していることが分かった。聞き取りの中で、特に、高専から編入した学生は、学内の具体的施設まで言及し、志望が明確で大学での学修にも満足度が高かった。

また、学部時代の学び方（問 18）については、進学した学生は、個人学習のみの学生は少なく（2 名）、グループでの学習（主：7 名、個人学習との併用：9 名）となっていた。

表 8 大学での学びでの気づき（問 19 に対応）

選 抜 区 分	発言内容
総 合	・ 類別の方がいろいろ考え、頑張ることにつながる。 ・ 学習・研究の仕方は自分 1 人での学習から周囲の友人や有識者にコミュニケーションを取って教わるように変化した。 ・ 大人数講義の際、教育が手薄になる。 ・ 根本的な意味を考えながら学習することは、研究活動においても重要である。 ・ グループワークの講義が有意義だった。 ・ 講義では一つ一つを理解することに時間がかかるが TA が丁寧に教えてくれて理解が進んだ。
推 薦	・ 講義では高校時代の内容が前提となっていることが多い。 ・ 物理では公式を単に丸暗記しただけで、学部ではさらに式が増えてしまったこともあり難しいと感じた。
一 般	・ 学生は求められる数値を出すことだけに邁進して、実験より何がわかるのか示されるのかわかっていない。 ・ 専門科目の導入教育のようなカリキュラムが望ましい。例えばマテリアル系の学部では『鉄とは』、『非鉄とは』などの導入教育があればよい。 ・ コロナ禍で、ある専門科目が PDF 配布のみだった。 ・ 学部時代に躓いてしまう原因として、“頼れる人がいない”、頼り方が分からない”があるので、孤立させないような施策（授業外でも同学部の先輩に聞くことができる TA のような制度など）が行えれば良い。

表 9 研究室における教育（問 20 に対応）

意見	人数	
	全体	総合型
上級生の指導がある （英語、論文作成、プレゼン方法、研究）	5 名	3 名
上級生の指導がない	6 名	3 名
指導教員とコミュニケーションしやすい	5 名	2 名
研究が順調	13 名	7 名
研究の停滞時に旨く対応できた	2 名	1 名
研究テーマが自分に合致している	15 名	8 名

表 9 より、上級生による指導の有無も研究室毎で異

なるとともに、その指導内容についてもレポートの書き方、プレゼンの仕方など、研究室によって違いがあった。また、相談しやすい状況を作るために、同じ居室で作業したり上級生を介して指導したりする研究室が存在した。学生が指導教員に対し話にくいと感じている傾向があった。これらは選抜区分によらなかった。教育体制が整っているほど学生の満足度は高かった。

7 指導教員へのヒアリングによる学力への期待

集団<E>指導教員の研究分野は、AI・データサイエンス・機械加工・人間機能代行・生体機能材料・バイオセンサ・河川工学・3D イメージング処理など多岐に渡るものであった。その中で、研究室配属時に求める学生に求める学生の学力及び態度に関するヒアリング結果を図4及び表10に示した。その結果、指導教員の半数は、数学、専門科目などの基礎学力の必要性を答えた。次いで、プログラミング・データ分析の能力を気にしていた。

今回の調査前には、半数以上の教員は、学生の選抜区分を認識していなかった。総合型選抜の特性（表現力・主体性・協働性・多様性）も認知されておらず、これらが学年を経るにつれてトーンダウンしていく傾向があると考えられる。一部には「外部との窓口を担ってくれる」「表現力がある」など総合型選抜の学生の長所の指摘もあった。総合型選抜入学者9名のうち、1名のみ動機づけに課題があると指摘された。それ以外、いずれも、他の選抜の学生との比較で動機付けを含む研究を進める上で問題があると指摘された学生はいなかった。また、外国出身の教員から一般に日本の学生の動機付けが足りない傾向が指摘された。

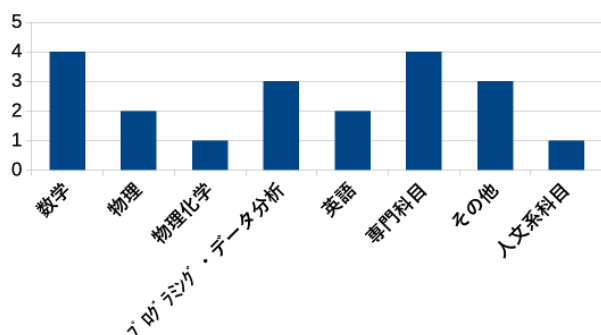


図4 指導教員により、研究室配属時に求められる学力（問21に対応、対象人数8名）縦軸：人数

表10 求める資質（問22に対応）

能力	・高校の教科書の知識を身に付けておいて欲しい。 ・モチベーションがあっても学力がないと維持できない。
態度	・あれって思う疑問をもってほしい。 ・ものをさわってほしい。 ・少しの違いに気づいてほしい。 ・論文のうそ、勘違い、インチキを見破る。 ・どこが研究の入口かを考えてほしい。 ・ゼミで優秀な学生はスケジュールリングとマネジメントに長けている。 ・疑問を抱え相談できることが重要、コミュニケーション力も必要。
姿勢	・モチベーションがない学生が問題。友人がいないとうまくいかない。孤立している学生が増えている。 ・2年次の志望がかなわず、モチベーションが下がる学生が少なからずいる。 ・モチベーションをもつこと、自己研鑽を怠らないこと、自分のスペックを挙げることに努力してほしい。
現状	・全員総合型がよい。入試で選択されている科目は得点を取りやすいことが主眼となっており、追及して学びたい科目対象にはなっていない場合が多い。

8 国際バカロレア選抜

集団<F>海外、および国内でのバカロレア認定校出身の学部2年生2名にヒアリングを行った。九州工業大学でも、国内の同等の教育を行う実施校からの受験生も増えている。今回ヒアリングした学生は、国内及び国外の学生（学部2年生）であった、いずれの学生もバカロレア認定校在籍時代に学習マネジメントが確立されており、勉強の進め方には苦勞していなかった。1名の学生は独力の学習形態をとっており、もう1名はグループでの学修形態をとっていた。

しかしながら、バカロレアでは日本での教育のように知識量が要求されるものではないため、大学の講義の学習内容において、ギャップが生じ、学生自身の学習の意欲・動機付けおよび日本式教育（学力）に適合するのに苦勞している実態があった。

9 学生生活実態調査との比較

集団<G>令和3年度学生生活実態調査から、修学上の問題とその解決方法について、学生全体の傾向を表11及び12に示した。

表 11 満足できない授業の理由 (問 24)

	工学部	情報工学部
授業内容がわからない	12%	13%
講義に魅力がない	16%	13%
授業が難しすぎる	9%	11%
授業が易しすぎる	1%	1%
指導が厳しすぎる	2%	2%
指導が厳しさがない	1%	1%
教員との触れ合いがない	6%	7%
施設・設備が不十分	2%	2%
宿題・レポート課題が多すぎる	12%	14%

これらの回答から、多くの学部生が勉学・研究に苦勞している中、研究室所属の学生が表 9 でもみられたように、教員には相談できない状況がみられた。実際、研究室でのヒアリングでも、教員の方が学生に対して質問するように促しても学生が躊躇してしまうことが多いとの回答がみられたが、学生の相談相手は主に友人であり、入学後にグループを作ることが学生にとって日常生活および学修にみられた (表 3 参照)。また、相談相手を友人とする学生は 1/4 程度であった (表 12 参照)。このことは、学生のグループ自身が学生にとってのシェルターになっている認識も確認された。

表 12 修学上の問題の解消法 (問 25 に対応)

	工学部	情報工学部
友人に相談	27%	27%
指導教員に相談	6%	7%
教務係・大学院係・学生係に相談	3%	4%
保健センターに相談	0%	0%
学生相談員に相談	0%	0%
学生総合支援室に相談	1%	0%
その他	2%	2%

10 総合型選抜入学者の成績傾向

集団 D (図 5) と同じ年度に入学した学部全体の学生 (図 6) との、学年ごとの GPA の推移を俯瞰した。

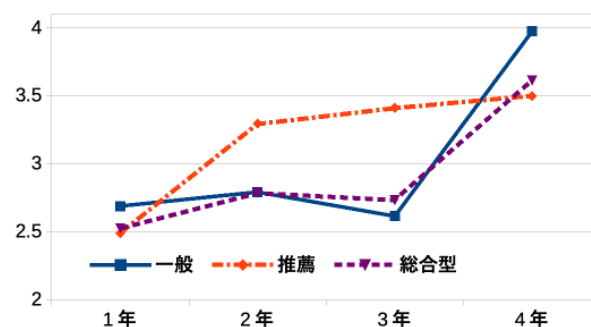


図 5 集団 D の学部時代における GPA の変化
注) 調査した研究室に配属された学生の選抜区分ごとでの比較

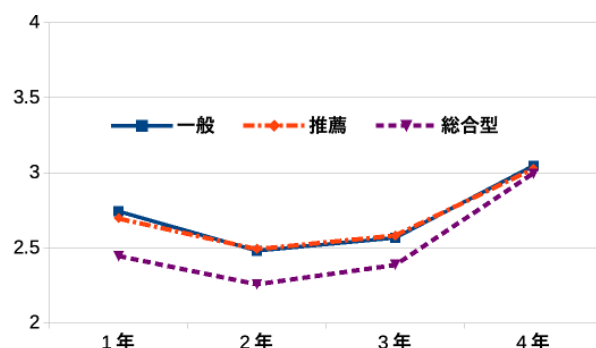


図 6 集団 D と同じ年度に入学した全学部学生の GPA の変化

図 6 によれば入学時の学力差が 4 年次には GPA の差異がほぼなくなり学力差が解消されている。学力差が解消されている理由としてコロナ禍で講義が不十分であった点を鑑みて、博士前期課程に進学時の入学者選抜により、学生の学部での学力は担保されている状況があると考えられる。一方で、一般選抜と比べて学部教育における学修マネジメントが優れていることを示唆していると考えられることから (表 3, 5, 6 のアンケートやヒアリングからもその点が他選抜の学生との差異があった)、図 5~8 においてより多くの集団において同様の比較を行ったものである。これは小集団でのヒアリング、アンケートの結果を裏付けるためである。図 5 でみられる 4 年次の GPA の伸びは主として、卒業研究によるものであり、このことも、5 節で述べたように、総合型の学生が卒業研究に対応できていることを示している。

個別にみると、今回ヒアリングした学生で、卒業研究において最も多様な知識・技能を獲得していたと思われる学生は、学部は独力で学習を進め (公式にたよらず内容を把握する作業を実施) 研究対象を二転させ

ていた（機械→流体→生物）。しかし、このように能動的な学修を進めている学生の GPA は平均以上ではあるが、特段良くはなかった。

問 2 の結果を見ると、総合型の学生が学内でグループで学んでいる傾向が高く、ヒアリングした総合型以外の学生とは対照的な結果になっていた（表 3 参照）。グループに所属することで学生は履修時、レポート作成、試験対策などの安定した学修環境を得ることができる。

俯瞰的視点及び具体的な科目でも確認する。2019 年度に入学した学生は、解析学において成績における差異があると考えられる。それは 2023 年度入学者と比較しても差が大きいと考えることができる。ここで解析学は学部学生が最も苦勞する科目の一つである。

図 6, 7 で示されているように、入学時に総合型選抜の学生は、一般選抜と比較すると学力が不足している傾向がある。しかし図 5, 8 からこの学力差は、専門科目を受講する 3 年次にはほぼ解消されていることがわかった。これは学修環境の改善、総合的な学びに繋がるとともに、学びの定着がみられていることを示唆している。

また、卒業研究段階に入ると、研究室の教育体制も大きいと考えられる。表 9, 10 にみられるように、研究室内で輪講は言うまでもなくプレゼン、論文作成のノウハウを系統的に実施している研究室とそうでない研究室の間では差異が生じる可能性がある。

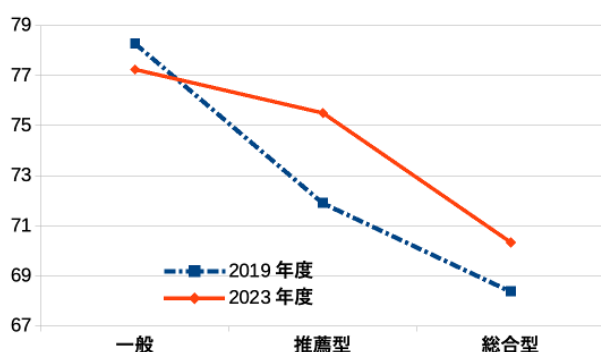


図 7 工学部（2019, 2023 年度）解析学成績

2020 年から遠隔講義を含めて、専門科目の講義がおこなわれる中で、学生はより高度な学習が要求されることになる。学部 3 年度の履修登録の多い科目での比較したところ、総合型選抜で入学した学生がよい成績を示す傾向が示された（図 8 参照）。グラフィックス演習では、チームでのソフトウェア活動も行っているが、演習にて、総合型選抜で入学した学生が果たす役割がポジティブに働いている可能性がある。

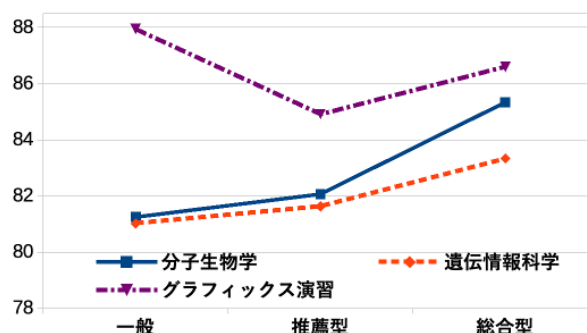


図 8 専門科目（情報工学部 2021 年度）成績

11 おわりに

アンケート及びヒアリングの結果から、コロナ禍の学修状況を調査した。以下の事実を挙げるができる。

多様な学力背景から選抜された学生は、高校時代の知識を前提とした講義を受け、入学時に高校時代の知識の不足を図 3 で示すような形で実感していた。また、入学時に選択・決定していた志望にも変化・ゆらぎが生まれていた。そして研究志望を細かく変えていた（問 17）。しかしながら、現状では、学生は、指導教員や大学組織に学習などについて相談することは選択せず、周囲の学生に相談することが主な選択肢となっていた（表 12 参照）。一方、教員も、学生のモチベーション、孤立化、コミュニケーションの重要性を認識していた（表 10 参照）。この点は、今後の課題となろう。

コロナ禍において、一部の専門科目の講義において PDF 配布のみという状況も生じていた。その中で他者に頼らず学習を進めることができた学生は自律的な学習を深めることができたと考えられる。しかし多くの学生は孤立化したり、勉強に苦勞したりしている場合がみられた（全国大学生協連, 2023）。

一方、国内と異なる教育カリキュラム（バカロレア選抜）で入学してきた学生たちは、日本独自の高校時代からの知識重視の教育を基礎とした学びに違和感を感じながら、モチベーションと学力を日本の大学に合わせることに取り組む現実がある。

表 8～10 が示したように、学びのマネジメントと動機付けは学修の大きな要因となっている。学生が不足している知識の理解を深めると同時に志望する研究のアウトラインを把握することができることで学修状況が改善できることが示唆された。

実際、学修のマネジメントを確立できた学生たち

は入学時の成績が芳しくなくても大学院進学以降は順調な学生生活を送れたと考えられた（図 5 参照）。また、配属される研究室の教育体制も大きく学生の学修体制に影響することがわかる（表 9 参照）。動機づけと学力が互いに補完される学修環境を提供することが重要だと考えられた。

総合型選抜に期待した、多様な学生を受け入れることは学内の活性化に有効だと考えられるが、そのためには受け入れた学生に対して選抜を鑑みたサポートも講じる必要があるだろう。

注

- 1) 本研究については九州工業大学の所属している期間にのみ参画
- 2) コロナ禍（2020～2023 年）においては遠隔授業や海外渡航の制限などが設けられた。

謝辞

本研究の調査にあたり、九州工業大学の複数の教員から率直なご意見やお考えを頂戴しましたことに対して、謝意を表します。

参考文献

- 藤江美奈・安永卓生・播磨良輔・山下修充（2019）.「入学者選抜の観点からグループワークの評価方法とその制度設計」『令和元年度 全国大学入学者選抜研究連絡協議大会（第14回）研究発表予稿集Ⅰ』,185-190.
- 木村治生（2021）.「推薦入試・AO 入試の効果に関するレビュー研究」『大学入試研究ジャーナル』 **31**, 167-174.
- 木村智志・播磨良輔・大石哲也・安永卓生（2024）.「九州工業大学における多面的・総合的な入試の制度設計検証Ⅱ」『大学入試研究ジャーナル』 **34**, 126-133.
- 全国大学生生活協同組合連合会(2023).「第58回学生生活実態調査概要報告」<https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html> (2023年3月1日).